

2018年7月8日@クロスウェイ教会

イザヤ40：27-31

「鷺のように共に翼を広げて」

もうちょうど一年半以上前になります2017年の初めに、一つの映画が話題になりました。「沈黙」という映画です。私も観た！という方、おられますでしょうか？！その方々は、もう既にご存知だと思いますが、この作品は17世紀、江戸初期の時代、幕府による激しいキリシタン弾圧下の長崎に起こった史実に基づいて書かれた遠藤周作による歴史小説「沈黙」が元になっています。棄教、信仰を捨てることを迫られる中、そのような迫害下に生きるキリスト者の信仰とその戦い、不条理極まりない苦しみを描いています。「沈黙」というタイトルの通り、このあり得ない状況の中で「何故、神は黙っておられるのか？」という現実、歴史の事実を現代に生きる私たちに生々しく教えてくれます。私自身、映画を観終わった直後は、色々考えさせられ一言では消化仕切れませんでした。ただ真実に言えること、それは、日本の歴史において、そのような不条理極まりない迫害が確かにあった、ということです。それから約400年後に…、この中には日本の地で信仰生活を持たれたという方がどのくらいおられるでしょうか？私たちはクリスチャンとして信仰をもって生活している。きょうこのように集い、主を賛美し、みことばを聞いている。歴史を振り返ってみると、このきょうという出来事が本当に驚くべき恵みである、ということをおぼえています。不条理と直面する、主役のロドリゴ神父は映画の中で、こう言います。

「主よ、あなたは何故、黙ったままなのですか？」

本日開かれました箇所からも神の民、イスラエルの同じ葛藤と苦しみが伝わってきます。27節「私の道は主に隠れ、私の正しい訴えは、私の神に見過ごしにされている」と。いったい、ここでは神の民がいかなる状況に立たされているのか？39章のみことばに耳を傾けたいと思います。39章では6節からヒゼキヤに、「見よ。あなたの家にある物、あなたの先祖たちが今日まで、たくわえてきた物がすべて、バビロンへ運び去られる日が来ている。何一つ残されまい。」とあり、7節では、「また、あなたの生む、あなた自身の息子たちのうち、捕らえられてバビロンの王の宮殿で宦官となる者があろう。」と、バビロン帝国によるイスラエルの民の捕囚が預言されます。捕囚とは、戦争などで敗けた国民が、勝った国民に連れ去られて、捕らえられること、すなわち服役されることです。要するに、バビロン帝国によるイスラエルの民の強制移住です。39章の預言の通りに、紀元前586年頃、この捕囚の苦しみをイスラエルの民は身をもって体験しました。イスラエルの民がバビロン帝国に捕らえられた。神の選びの民がバビロン帝国の支配の下に捕らえられたのです。

しかし、イザヤ書40章では一転して「『慰めよ。慰めよ。わたしの民を』とあなたがたの神は仰せられる。…」と始まります。何と40章からはバビロン捕囚のただ中にある民に対する慰めの預言が始まるのです。この慰めと解放の預言は、捕囚からの解放を告げる希望の預言です。そのような捕囚の痛み、また、そこからの解放という、2つの区切り目が39章と40章の間にはありません。でも、捕囚のただ中にある神の民の現実はどうでしょうか？先ほど読みました27節、神が民に向かって叱責するかのよう、こう語っているのです。「ヤコブよ。なぜ言うのか。イスラエルよ。なぜ言い張るのか。『私の道は主に隠れ、私の正しい訴えは、私の神に見過ごしにされている』と。」

最初にお話しました江戸時代初期の日本にいたキリシタンの戦い、葛藤の中身と、バビロン捕囚にあった神の民の戦い、葛藤がどれほど同じであるかは分かりません。しかし、このイスラエルの叫びは、先に紹介しました「沈黙」の、ロドリゴ神父の叫びと重なる叫びだと思うのです。きょうを生きる私たちは、バビロン捕囚のように囚われているわけでもありませんし、江戸時代初期にあったような残虐な迫害にあっているわけでもありません。でも、そうであっても「ああ、神様は何故…？」と、それがたとえ些細な原因だとしても、不意に「私自身」の立たされている状況を見た時に、そう呟いてしまうことが、もしかしたらあるかもしれません。世界情勢や自然災害、不条理と思われる出来事を見聞きしたり、実際に体験した時に…。私たち信仰者は、「ああ、主よ…」と、今の状況、先の分からない未来に不安と葛藤を覚えることがあるかもしれない。そして、そんな時、もしかしたら私たちは知らず知らずのうちに、神様に呟いてしまうこともあるかもしれない。まるで、27節の民のように「私の道は主に隠れ、私の正しい訴えは、私の神に見過ぎしにされている」と。

しかし、主はそのような状態に陥っている民に、一生懸命ご自身の存在を悟らせようと御声を放たれます。「ヤコブよ。なぜ言うのか。」「イスラエルよ。なぜ言い張るのか。」と、愛する民に向かって御声を放たれます。神はイスラエルをエジプトの地から贖い出された救いの神です。その神様が、神に失望している人々に訴えかけるように呼びかけるのです。28節「あなたは知らないのか、聞いていないのか。主は永遠の神、地の果てまで創造された方。」と。「わたしがあなたの神である」と思い起こさせるかのごとく、主は語りかけるのです。

きょうを生きる私たちにも贖い主なる神は御声を放ち続けています。もしかしたらきょうも、「ああ、神様は何故？」と呟いてしまう私たちがいるかもしれません。そんな私たちに主は語りかけているのです。「あなたは知らないのか、聞いていないのか。」と。これは「あなたは知っているだろう？聞いているだろう？」と思い出させるかのように、語っている主のことばです。永遠の神、地の果てまで創造された主がバビロンに囚われていた民、困難に立たされていた民と同じくきょう、私たちに一生懸命ご自身の存在を悟らせようと語っている。「あなたは知っているだろう？聞いているだろう？」ありとあらゆる悪がはびこる、希望を見失ってしまいそんなこの難しい世の中を生きている私たちに、主は「わたしがあなたの神である」と、語り続けているのです。

「疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない。」28～31節は「疲れる」「たゆむ」ということばが何度も出てきます。主はご自身を「疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない」力強いお方であることを証されます。さらにそのように力強く偉大な主は、29節「疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。」とあります。そのような力強い主の存在と疲れた者に対する約束がある中で、30～31節で主は2通りの人々を対比しています。それは疲れ、つまずき倒れてしまう「若者」「若い男」と走ってもたゆまず、歩いても疲れない「主を待ち望む者」です。「若者」「若い男」とはどういう人でしょうか？それは、みことばにある通り、私たち人間の個々の存在の弱さ、儂さ、その現実を主はここで明らかにしておられます。でも、ここでは「しかし、主を待ち望む者は…」と対比されて語られているわけです。ですから、30節に出てくる「若者」「若い男」とは、「主を待ち望めない弱き状態で留まっている者」とも言えるかもしれません。バビロンに囚われていたイスラエルの呟きに注目してください。「私の道は主に隠れ、私の正しい訴えは、私の神に見過ぎしにされている。」「私の道」「私の訴え」私中心です。私を中心に考え、歩もうとする人々、彼らは言うまでもなく主を待ち望めませ

ん。でも、私という存在が私であるがゆえに、何か自分に降りかかると、どうしても私という内側に目を向けて、そのことで囚われながら生きてしまうのが、私たち人間ではないでしょうか？もしかすると私たちも呟いてしまうことがあるかもしれない。「ああ、私は神に見過ごしにされているんじゃないか？」と。

クリスチャン作家の三浦綾子は、著書の中でこのような言葉を語ります。

「人間は何と不自由な存在であろう。自分の心を自分でコントロールすることができないのだ。自分で自由に生きていると思っている者ほど、真の自由を知らない。」

自分では自分の心をコントロールできない…これは真実だと思います。私自身もあります。あることをきっかけに自分の心が囚われて、まるで迷路のようにグルグルと、自分の心をコントロールできなくなっている自分自身と直面する時が…。要するに、私たちの内側に真の自由、解放はない。私たちを解放するのは、私たち自身ではなく、唯一私たちの主です。だから、きょうも主は御声を私たちに放っているのです。「あなたは知らないのか、あなたは聞いていないのか。」永遠の神、地の果てまで創造されたお方が、「疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。」だから主は、私たちを「私自身」ではなく「主ご自身」へと目を向ける「主を待ち望む者」へと招いておられる。31節、主を待ち望む者は「新しく力を得」る。主を待ち望む者は「走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ」。そもそも28節、主ご自身が「疲れすることなく、たゆむことのない」お方です。その力強いお方が新しく力を与えるのです。ですから「走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ」のです。31節の「主を待ち望む者」とは彼らが特別力強いものではありません。29節「疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける」とあるように、弱き人間に働かせる力強い主による29節、このみことばの実現なのです。

では「主を待ち望む」とは具体的にどうすることなのか？教会では12月にアドベントという時期に入ります。特別主イエス様に思いを潜めて、主イエス様がこの地に救い主として来られたこと、そしてまた終わりの日に、再び来られるという約束を噛み締めて「主を待ち望む」。そのことを特別覚える期間として私たちは過ごします。主イエス様が誕生した約2000年前。イスラエルはヘロデ大王の時代でした。ヘロデ大王というとマタイ2章にあるベツレヘムとその近辺の2歳以下の男の子を一人残らず殺させた、という残虐極まりない姿から、私たちはどうしても独裁的なイメージを連想することと思います。実際に、よく教会学校で行われる降誕劇で描かれているのもそのような悪役です。ヘロデ大王がイスラエルを統治していた。そのような史実が示す通り、当時、神の救いがどうしても必要でした。真実の王が必要だった。そんな希望を失ってしまいそうな時代真っ只中に、私たちの救い主イエス様は、真実の王としてお生まれになりました。そしてその時代の背後には、実は降誕劇にはなかなか登場することのない「主を待ち望む人々」、希望を失ってしまいそうな時代に希望を持ち続けている人々がいました。ルカ2章を開きましょう。シメオンとアンナが登場します。きょうは特にルカ2：36からの女預言者アンナに目を留めたいと思います。彼女は当時84歳でした。若い時にやもめとなつてからずっと長い間、主を待ち望んで生きてきた人物です。イスラエルの救いを願って、日々宮を離れず神に仕えてきたのです。84歳になつてもです。救い主の到来を待ち望んで生きてきた人々は、決して主への信仰と希望を捨てずに忍耐深く主の救いを信じて待ち続けた人々でした。

私たちはこの力強い主の招きに応答して、主を待ち望んだシメオンやアンナのように、ただひたすらに主の助けと救いを信じ続けて、生涯を歩ませていただきたく願います。主が私たち個人

個人ではなく「ヤコブよ」「イスラエルよ」と神の民を、個人のように呼びかけられたように、私たちも「私」という個人の信仰の歩みを超えて「私たち」が共にこの時代を生きる神の民として、励まし合いつつ、一足一足主ご自身に心を向けて、歩ませていただきたく願います。そこに、主を待ち望んで進む私たち、キリストの教会の姿があります。

皆さんは、鷺が空を飛んでいるのを見たことがあるでしょうか？私は2年半前、イスラエル旅行に行った時に野生の鷺が岸壁の間を、飛んでいるのを見ました。その時に、はっとさせられました。大きな羽を広げた瞬間、まるで凧のように風に乗って動いているのです。羽を羽ばたかずに風に身を委ねる。滑空という飛び方です。滑空というのは、漢字のごとく空を滑るように、推進力を使わず、翼を大きく広げて動かさない状態で飛行する事を言うそうです。私が見た鷺は大空に気持ちよく身を委ねていました。

31節「主を待ち望む者は新しく力を得、鷺のように翼をかって上ることができる。」主を待ち望む者の姿とは、まさにこれです。鷺のように翼を広げて大空に身を委ねる。それだけで上にのぼることができる。たゆむことはありません。疲れることはありません。なぜなら、もはや自分の力ではないからです。主の御手の中で、その偉大な御力によって、のぼることができるからです。

「主を待ち望む者」別の訳の聖書を開くと、「主に希望を置く者は力を盛り返す」という訳がありました。非常に素晴らしい訳であると思います。実際に旧約聖書の元々のヘブル語でも、「待ち望む」の「待つ」は「忍耐を持つこと」、「望む」は「信頼を持つこと」という意味です。主に忍耐を持って信頼し続けていく。ですから「主を待ち望む」ことは「主に希望を置き続ける」ことです。シメオンもアンナもイスラエルの救いを願って主に希望を置き続けました。紀元前586年頃のバビロン捕囚の真っ只中にあるイスラエルの民にも主は、はっきりと「主に希望を置く者は力を盛り返す」と主に対する信頼へと招いておられる。今から約400年前の江戸時代初期のキリシタン弾圧下の時代だって同じです。たとえ人々に「神は沈黙している」と思われていたその時も、主は確かに生きておられた。「わたしに希望を置きなさい」とクリスチャンを招いておられた。そして歴史上、確かに主に希望を置き続けていった人々がいた。さらに、きょう2018年、同じこの世を生きている私たち、今この主のみことばに耳を傾けている私たちにも主は招いておられます。「わたしに希望を置きなさい」と。この地上において私たち神の民の歩みにはどの時代も全く困難がない時代なんてないでしょう。教会史を振り返ってみてもそうです。葛藤があります。戦いがあります。私たちの個人的状況にだって落ち潰されそうな困難や葛藤が及ぶことが時にはあります。でも、永遠の神、地の果の創造者である神様は変わらずに生きておられ、きょうもバビロン捕囚にあった神の民と同じように、私たち、このキリストのからだなる教会に御声を放って愛してくださっているのです。

「沈黙」のロドリゴ神父は、自身の苦しみごとに何度も「そういえば主もそうであった…」と、主イエス様の苦難と自分に降りかかる苦難を照らし合わせます。私たちは忘れてはいけません。私たちの主イエス様こそ、この世に来られ、誰よりも不条理な十字架の道を歩まれました。主イエス様は十字架上で叫ばれた。「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」この苦難の道を歩まれ、死に勝利された復活の主イエス様が、きょうも生きておられる。この事実なきょうを生きる私たちへの慰め、解放、救いがあります。主はきょう私たちに言われます。

「主を待ち望む者は新しく力を得、鷺のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ。」

この40章以降の主のみことばはバビロン捕囚という困難と苦しみの中にあつた神の民に対する解放の預言であり、私たちに対する様々な困難からの慰めと解放の神の宣言でもあります。私たちの主イエス・キリストにあつて解き放たれている神の救いの宣言です。2018年、きょうも感謝のうちに守られ、生かされている私たちです。たとえどんな困難が降りかかろうと、この主のみことばのごとく、私たちは、大空に身を委ねて上る鷲のように、主に希望を置き続けていきたく願います。そこには、もはや「私」からスタートするのではなく、「主ご自身」の新たなる御力によって初めてスタートされていく私たちの歩みがあります。私たちは鷲のように、そのままの姿ですべてを主に明け渡していいのです。いや、むしろその明け渡しから、力強い主の御手が、私たちをご自身の臨在で包み込み、鷲のように引き上げてくださるのです。私たちは、翼を大きく広げて上る鷲のように、ともに主の御手に全てを委ねて、祈り支え合い、支え合いながら、与えられている生涯を、私たちの主イエス・キリストにあつて、歩ませていただきたく願います。そこに私たちの希望があります。